ASLE-Japan ／文学・環境学会

NEWSLETTER

The Association for the Study of Literature and Environment in Japan

November 30, 2003 no. 15

日本における環境文学研究の方向性

代表　山里勝己

ASLE-Japan／文学・環境学会は、今年の３月に「自然ー都市、田園、そして野生」を総合テーマとして、琉球大学で国際シンポジウムを開催した。国際学会については、すでにニューズレター第１４号でさまざまな報告がなされている。

代表として、このような学会開催の意義やテーマ設定の背景について、役員会、学会総会での報告、そして国際シンポジウムの冒頭の挨拶の中でくりかえし述べてきた。ここでは、これからの学会の方向性、研究のありようについて、国際学会に至るまでの準備過程を振り返りながら再度まとめてみたい。

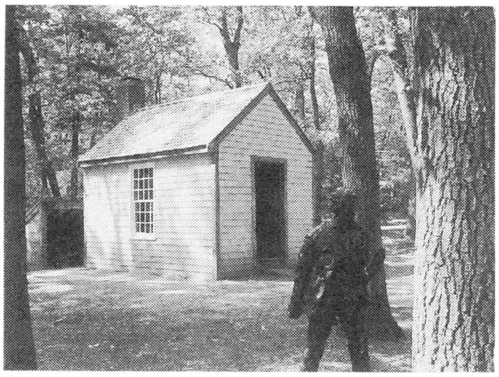
沖縄での代表挨拶で紹介したように、国際シンポジウムは２０００年夏のリノでの非公式の話し合いから計画が始まった。その際に話し合われ、２００２年のASLE-J役員会でも確認されたことは、（１）現在の環境文学の研究の方向性を押さえること、また、ASLE-J主催であることを考慮して、（２）アジアからの発信を重視する、ということであった。前者については、国際学会の総合テーマに反映され、後者については、韓国、台湾、日本の作家を中心にパネルを設定した。

「自然ー都市、田園、そして野生」という総合テーマは、どちらかと言えば、野生（ウイルダネス）に関するディスコースに大きく傾斜したこれまでの研究を振り返る中で、環境文学の研究対象を拡大し、同時にその研究のありようを多彩なものにしようという意図で設定されたものである。環境文学研究の対象をウィルダネスから解放し、自然または環境に関する多様・多彩な批評に拡大しようとする動きは、１９９２年から９３年にかけてカリフォルニア大学アーヴァイン校で行われた連続セミナーあたりから始まっているように思える。その成果をまとめたのがWilliam Cronon編の *Uncommon Ground: Rethinking the Human Place in Nature* (1995)であり、Cronon自身の“The Trouble with Wilderness; or, Getting Back to the Wrong Nature”と題する論文は“The time has come to rethink wilderness”という刺激的な文章で始まる。

最近のアメリカの研究を見ていると、このような流れが研究の主流になってきていることは明らかだ。たとえば、Michael Bennett と David W. Teague編の *The Nature of Cities: Ecocriticism and Urban Environments* (1999) や、Karla Armbruster と Kathleen R. Wallaceが編集した *Beyond Nature Writing: Expanding the Boundaries of Ecocriticism* (2001) に見られるのは “the landscapes in which most people live--cities, suburbs, and rural areas” に向けられた注意深いまなざしである (Armbruster and Wallace 6). あるいは、Lawrence Buell がWiilliam Carlos Williamsの *Patterson*をバイオリージョナリズムの視点から分析するというように、環境文学研究のここ４，５年の成果は、この分野が爆発的にその領域を拡大しつつ、研究方法とその対象を多様なものにしてきていることを顕著に示している。また、今年のボストンでのASLE-USAの大会に間に合わせるかのように出版されたMichael P. BranchとScott Slovic編の *The ISLE Reader: Ecocriticism, 1993-2003*は、ISLE に掲載された代表的な論文を集めているが、同書は、エコクリティシズムの過去１０年間の進展を記録しつつ、同時に今後の研究の方向性を示唆する。

ASLE-Japanのもうひとつの研究課題は、上述したように、アジアからの発信である。アジア的な自然観、環境意識、環境文学の研究からどのような方法、エコロジカル・ディスコースを生み出すことができるか。これは、アジアの研究者に問われている大きな課題であろう。今年の１２月には台湾でもうひとつの国際学会が開催される。日本で言えば、スナイダーが基調講演で指摘したように、万葉集から始まる大きな自然の文学の流れがある。あるいは、宮沢賢治をはじめとする近代日本の環境文学を世界的な文脈でどのように評価するか。これはエコクリティシズムの導入による豊かな成果が期待される領域であろう。

やるべきことは山積している。会員の多様、多彩な研究、大胆な理論の創造に期待したい。



第５回ASLE-US大会報告１

茅野佳子　（明星大学）

６月３日から７日までの５日間、チャールズ川沿いに広がるボストン大学のキャンパスで、第５回ASLE-US大会が開催された。大会のテーマは“The Solid Earth! The Actual World!”（ソローの『メインの森』からの一節）で、プログラムの表紙と大会記念のTシャツにはソローが測量し水深を記したWalden Pondの図が描かれていた。大会主催大学のAdam Sweeting教授によると、参加者数は二年前の大会より１００人ほど増えて、６００人近くにのぼったという。また、ASLE大会としては初めて東海岸で、しかもボストンのような大都市で開催されたことも大きな意味をもつと語っていた。

カナダ、英国、スコットランド、オーストラリア、イタリア、スペイン、ドイツ、プエルトリコ、韓国等から参加があり、三日目の“Workshop for ASLE in International Affiliates”のセッションで、意見や情報を交換する機会をもった。ASLE-Japanは、Bruce Allen氏が中心となって発足以来の活動状況を報告し、特に最近の沖縄での国際シンポジウムの開催の報告は注目を集めた。ASLEを組織するに至っていないヨーロッパ諸国がASLE-ヨーロッパ連合を作ることへの提言や、国境を越えたネットワーク作りを望む声、US大会の全体会に他の国の研究者による講演も企画すべきという指摘等があった。

５日間の大会期間に８つの全体会（Plenary Sessions）があり、１１９の多様なテーマのパネル発表が１０のブロックに分けられ、同時進行で行なわれた。初日の午後には８つのワークショップがあり、その中に２年前の大会の全体会で鳥の歌との掛合いでクラリネットを演奏したDavid Rothenbergによる“Way Beyond Words: How to Use Music in the Teaching of Literature and Nature”があった。The Book of Music & Nature（CD付きのテキスト）から、ニューギニアの人々の労働歌と調和した自然の音（鳥の声を含む）や、人間がうたっているように聞こえる鳥の歌声（Mockingbird他）、Rothenberg自身が演奏し鳥がそれに反応してうたっている掛合いなどを聞き、イメージや授業の案などを話し合った。人間の音楽と自然の音（動物の声など）が多くを共有することや、音楽を通して自然が近づいてくるというRothenbergの基本姿勢が実感できるワークショップだった。

オープニングは、ボストンに３０年以上住む都市歴史学者Sam Bass Warnerによる“Where might an environmental critic stand?”という講演だった。Warnerは、その著書の中で、歴史的視野に立って９０年代のアメリカが直面していた経済的・社会的問題のルーツを検証したり、ボストンの現状や直面する問題を住民の声を混じえながら浮き彫りにしているが、講演の中でも歴史的視野をもつことの必要性を強調し、地球上に微生物が生まれ、蜘蛛の巣のようにはり巡らされたインターアクションを通じて生命を維持してきた地球（Warnerは「ガイア」という言葉を用いていた）の歴史にまで遡った。Warnerの主張する歴史的視点は、単に現在のボストンの状況を理解するだけでなく、様々な大都市の抱える問題への対処法や、都市を語る新しい表現の発見にもつながるものである。

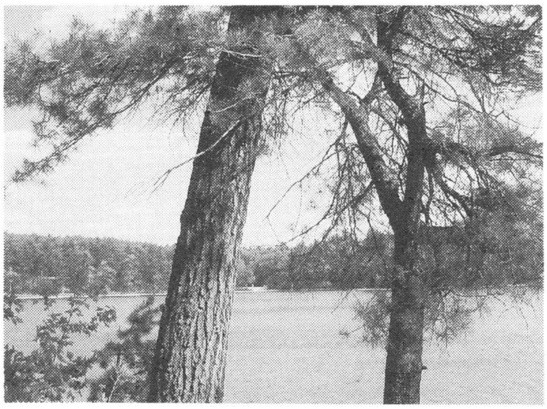
「環境的公正」（environmental justice）の視点から特に興味深かった全体会は、ミステリー小説（ブランチ・シリーズ）で知られるBarbara Neelyによるリーディングだった。ボストンのラジオ局のパーソナリティーとして、また環境的公正のために活動する団体の中心人物として活躍するNeelyの小説は、ミステリー小説であると同時に、人種・階級・ジェンダー・性・人権問題や環境問題（特に環境的公正）を扱った社会小説でもある。朗読したのは、シリーズの中から、ボストンを舞台とする第三作目“Blanche Cleans Up”の一節で、ボストンの黒人が多く住むRoxbury地区で実際に問題になった鉛害と青少年犯罪との関係が話題になっているくだりである。古いペンキに含まれる鉛が子どもの体内に入ると、心身障害や暴力事件への引き金になることが立証されているという。

午後のフィールド・セッションでは、Neelyの小説に出てきたRoxbury地区を訪れ、環境運動団体DSNI（Dudley Street Neighborhood Initiative）の職員の説明を聞きながら、改善された町の様子を見学するコースに多くの参加者が集まった。Roxbery地区は、１９８０年代中頃、貧困、放火、空き地へのゴミの投棄等で荒れ果てていたのを、住民参加による組織DSNIができて地域の立て直しに取り組み、話し合いを積み重ねてひとつひとつの問題を解決してきたという。DSNIでは地域住民を雇用し、住環境を整備するとともに、前述の鉛害対策にも取り組み、都市における安全で持続可能な農業を推進し、ドキュメンタリー映画の製作や本の出版を通してその取り組みと成果の広報にも努めている。環境的公正を実現しつつあるモデル的な取り組みと言えるだろう。フィールド・セッションは、他にもボストンの都市計画の歴史と成果を見学する数コースが用意されており、New York のCentral Parkを設計したF. L. Olmstedの設計事務所と庭を見学するコースもあった。

全大会の中でも特に注目を集めたディベートが二つあり、その一つがLeo MarxとLawrence Buell による“An Ecocritical Debate”だった。Marxは、エコセントリズム（ecocentrism）を強調しがちな環境批評に対し、社会を実際に変革していくためには人間中心主義（anthropocentrism）の視点を持ち続けることが必要であることを強調し、理想主義や感情主義（feel-good-ism）に陥りがちな環境批評に警鐘を鳴らした。これに対し自らを“strategic ecocentrist”と称したBuellは、Marxの

考えに同調しながらも、環境批評が多岐にわたる動きであることを強調し、人の「想像力」は単なる「夢」や「理想」ではなく根本的に物事を変えていく力をもつと主張した。両者の提示した視点が、相反する二者択一の選択肢ではなく、相補的に働くべきものであるという印象を受けた。

もう一つのディベートは、Edward Wilson とLaura Dassow Walls による"Seeking Common Ground: A Dialogue on Integrating the Sciences and Humanities"で、こちらも活発な議論がなされた。すでに環境改善のために自然科学・社会科学・人文科学を結ぶ重要な役割を果たしてきたWilsonは、自ら提唱する "biophilia"や"consilience"といった理論を説明しながら、人間の精神(mind)の働きを科学的に理解することがやがて可能になり、それがさまざまな分野を結び付けるだろうと確信をもって語った。WallsはWilsonの功績に賞賛の意を表しながらも、科学がすべてを解明できるという視点に懸念を示し、抽象化したり科学的に体系化したりすることの不可能な人の経験の複雑さや主観性を強調した。しかし、科学も文学も宇宙の中に人間を位置付けることを共通に目指すものであり、科学と人文の分野がお互いを理解し歩み寄ることがますます重要になっているという点で両者は一致していた。(二つのディベートの様子については、Bruce Allen 氏が英文で詳しくまとめてくれたものを原文で別に掲載し



ているので、そちらもご参照ください。)

科学と文学の役割についてさらに考えさせられた全体会が、生物学者・エコロジスト・作家という肩書きをもち、環境と母体との関係の研究の第一人者Sandra Steingraber による"Protecting The First Environment: Toward a Natural History of Pregnancy and Birth"だった。Steingraberは、自らの癌体験と生まれ育った環境をふり返り、環境汚染の人体への影響(特に癌との関係)について語った後、自らの出産体験を綴った"Having Faith: An Ecologist's Journey to Motherhood"の一節を朗読した。大学時代に癌を告知され、生物学を専攻、英文学を副専攻としたSteingraberの文章は、自然の比喩を豊富に用い、科学的なテーマを扱いながら、ポエティックで力強く、"New Rachel Carson"として高く評価されているというのもうなづけた。環境文学の分野において、文学的感性と表現力をもった科学者の果たす役割は重要であると感じた。同じ日に科学と人文の接点を探るパネルもあり、各パネル内の一貫性だけでなく、大会全体の構成がうまく工夫されていると思った。

本大会へのASLE-Japanからの参加者は9名で、そのうち5名が研究発表を行なった。発表者及びパネルの参加者からの報告を(英文のものは和訳して)以下に簡単にまとめておく。(敬称略、発表順)

"Taking the Gaia Hypothesis Seriously?and Having Fun with It"では、英国の科学者James Lovelockが提唱し論議を呼んだ「ガイア仮説(のちのガイア理論)」(地球はそれ自体が大きなひとつの生命体であるという説)の影響と将来への展望を、6人の発表者が語った。まず茅野佳子(明星大学)が、"Gaia Symphony: An Attempt to Make the Invisible Visible"と題して、龍村仁監督がライフワークとして製作し、草の根の自主上映を通じて多くの人に支持されているドキュメンタリー映画「地球交響曲(Gaia Symphony)」を紹介。境界を越え、視覚と聴覚を通して環境意識に訴える方法として、ドキュメンタリー映画の可能性を示した。他に、Alice Walkerの作品に見られる環境意識に関する発表、The Church of All Worldsの代表による地球中心の精神性の話、ガイア理論の提唱する価値観と現在のグローバル市場経済の価値観との比較考察、地球の恒常性(homeostasis)や自動調節システム(self-regulatory system)という観点から検証した、イタリアのあるコミュニティーの生活様式と古代エジプトのピラミッド製作に見られる自然に根ざした人智の報告、ガイア理論と関連づけた社会変革のヴィジョンの提示等が行われた。(報告:茅野)

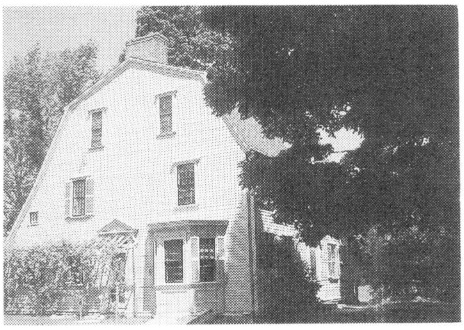
"Reading Culture 1: Tea, Tree, Lawn, Sea"では、宜野座綾乃(ネヴァダ大学)が岡倉天心のThe Book of Teaを取り上げ、ソローの小屋と茶室とを比較し、両者を自然と文化と宗教哲学の交わる空間として位置付け、さらに日本の慣習や儀式が小さな物によって大自然(全宇宙)を表象し、「内なる野生」探究の場となり得ることを示唆した。"Arbor Day"(植樹の日)と呼ばれる祭日に関する発表では、「木を植える」行為が、プレーリーのように木の無い土地のエコロジーを見えなくしてしまう危険性が問われ、Baja湾やCortesの島々の先住民の岩絵に関する発表では、岩絵から読み取れる土地に関するエコロジカルな理解が指摘された。(報告:Eric Ball)

"Interdisciplinary Studies 2: Literature and Architecture"では、最初にTom Scanlanが、F.L. Wrightとも深い交流のあったJ. JensenのLandscape Architectureにおける思想と技法を語った。次に、上地直美(インディアナ大学)が、ヨーロッパのロマン主義作家 が提唱した"organic principle"を、 アメリカ文化の独立を提唱したEmerson が建築思想に発展させ、のちにF. Furness, L.Sullivan, F. L. Wrightが具象化するまでを、スライドを主体に説明した。最後にイギリスのロマン主義研究で有名なOnno Oerlemansが「ColeridgeやWordsworthは、anti-city派で、建物を町に作ること自体に反対した」という極論を展開したため、殆どの質疑応答はこの議題に集中した。(報告:上地)

"Troubled Water: Politics and Pollution Across the Shores"では、Bruce Allen(順天堂大学)が環境活動家であり作家でもある石牟礼道子とインドのArundai Royの作品を比較考察し、類似点として様々なジャンル(フィクションとノンフィクション、口承物語、神話、歌、踊り等)

を融合させた作風を指摘し、それぞれの作品に描かれたダム建設の影響という共通の問題を分析した。また、アメリカの川の私有化に伴う様々な問題を告発する発表もあった。(報告：Bruce Allen)

本大会で唯一農業に焦点を当てたパネル"Down on the Farm"では、まず加藤貞通（名古屋大学）が「身土不二」の思想を取りあげ、日本の自然農法の第二世代リーダーである川口由一の思想と実践を、Wes Jackson、Wendell Berry等のアメリカの農業思想と対比し、根底の自然観の相違とともに、「身土不二」の発想に関して注目すべき共通性があることを論じた。次いでWilliam Majorが、現代の環境・エコロジー批評の中で、不当にも農業に向けられる関心が小さな割合しか占めていないことを指摘し、W. Berry に言及しつつ"agrarianism"の復権が必要であることを論じた。最後に、Andrew McMurryは、経済システムと倫理システムの融合を志すBerryの思想が、カテゴリー・エラーを犯していることを指摘し、Berryの「健康」を判断の基準とする考え方こそ環境主義者にとってのモデル・システムとなり得ると結論づけた。（報告：William Major・加藤）



四日目夜のBanquetでは、Abenaki Indianの語り部Joseph Bruchacが二本のフルートを手にして現われ、独特の語り口で、伝統的な人間観や土地観（自然観）を詩の朗読のようにうたい上げげた。ダブル・フルートと呼ばれるフルートは、一方が変化することのない大地を現わし、同じ音を伴奏するのに使われ、もう一方が変化し続ける生命を意味し、さまざまな音色を奏でるのに使われるそうで、語りの途中でBruchacは効果的にフルートの演奏を挿入していた。われわれは大地から生まれ大地へ帰るのであり、われわれが環境をつくり、環境がわれわれをつくるのだ、という結びが印象的だった。Banquetの終わりには、二年後の大会がオレゴン州のユージーンで開かれるという報告があり、参加者は名残りが尽きないままに、オレゴンでの再開を約束して寮へもどっていった。

大会最終日の午後、恒例のフィールド・トリップがあり、Walden Pond、Mt. Monadnock, "Nessmuck" Countryの３つのコースが用意された。Waldenコースに参加した会員から、当日はあいにくの雨だったが、かえって詩的で趣きがあったという感想が寄せられた。ちなみに筆者は最終日まで残れなかったのだが、大会の直前と最中にWalden Pondを訪れる機会があり、晴天の日の青く澄んだ湖水と曇り空の下の深い緑色の湖水を眺めながら散策することができた。Concordは歴史と自然の融合したとても魅力的な町だった。

●●●●●●●●●●●●●●●●●●●●●●●●●●●

ASLE-US 大会報告２

ブルース・アレン（順天堂大学）

(1) An Ecocritical Debate--by Leo Marx and Lawrence Buell

Leo Marx and Lawrence Buell, two of the preeminent scholars in the field of environmental literature, came together in a spirited debate-discussion that touched deeply on some of the primary assumptions of the ecocritical movement. Although it has become virtually ASLE-ecocritical orthodoxy to champion ecocentrism in favor of the prevailing anthropocentric outlook of modern society, Marx raised some important concerns about this. He expressed his worry that ecocentrism may not provide a sufficient perspective for getting people to act to change society.

In the debate it was Leo Marx who presented the strongest words of caution to ecocritical scholars. Although agreeing with much of the spirit of ecocriticism and applauding much of its work, he outlined a number of concerns about problems that may arise if some of its tenets are taken too far.

Central to his critique, Marx suggested that ecocritics still need to at least remember the importance of the anthropocentric viewpoint, even if they maintain a preference for the ecocentric. He argued that we need to further question the relative merits of ecocentrism vs. anthropocentrism; in particular by giving more attention to the question of which of these views of nature best lends itself to action. He expressed his concern that if we forget or abandon the anthropocentric outlook we may be unable to take sufficient practical steps to actually change society. Marx stressed that environmental action must take place in the larger context of the world of society and politics. He had some fears that the ecocentric outlook may not provide enough care about humans.

As an example, he referred to Buell's valuing of *Walden* over *Moby Dick*, as expressed in Buell's book *The Environmental Imagination*. He referred to Buell's claim that *Moby Dick* says "too much about whaling and not enough about humans." In contrast, Marx admits that he is relatively more concerned with the "whaling than the whales." He feels that the strength of Melville' tale, focusing on its "capacious trope of the whale," lies primarily in its attention to the human society that generated whaling. For him, Melville's information about whales is supportive, but it does not represent the primary genius of the work. Marx spoke of how ecocritics generally favor

an ethic of "species egalitarianism," but he feels that the anthropocentric outlook--or at least some of its concerns--is still essential if we are to change society.

Marx further warned that ecocriticism may have a tendency to be "a bit too dreamy." In this regard he referred to an interesting letter from Melville to Nathaniel Hawthorne in which Melville acknowledged that there is "something to the all feeling"--but that he didn't surrender to it. What is troubling to Melville is that man may too easily surrender to a temporary feeling. Marx, sharing this concern, worries that ecocentric writers may be indulging in a similar emotionalism. This is fine to a point, he says, but he questions, "Is this enough to change the world?" Similarly, he argues that ecocriticism is fundamentally idealistic, but he worries if this is enough. Artists may be the antennae of the world, but he wonders if this is enough to change people's minds.

To these comments, Lawrence Buell responded that he shares similar ultimate concerns and goals with Marx, but that his training and background have been different, leading him to a somewhat different focus in his work. Buell, calling himself basically a "country boy," said he is relatively more interested in the notion of "Locale," in contrast to the interest of Marx (the "city boy" in that of "Nation." Buell has concerned himself with questions relating to the town-city nexus whereas Marx has concerned himself more with those related to the machine and the garden. Buell, too, is wary of the danger of mere "feelgood-ism" in nature writing studies, but he feels confident that ecocriticism is not a singular, but rather a plural movement. He praised its attention to a number of key concerns. Among these he mentioned the idea of "inhabitation" the idea of the importance of living in one place. Another is the questioning the balance between the human-constructed and the natural world, and in doing this, the shifting from a human-centered to a eco-or bio-centered perspective. In defense of his emphasis on place, he pointed out that "there never was an is without a where," reminding us that much of modern literature has forgotten or undervalued the where. He stressed that all literature has at least some ecological implications, and that ecocriticism casts a wide enough net to avoid being a "single issue" movement.

According to Buell, Marx stresses modernity as the prime driver of development, whereas he himself chooses to focus more on "environmentality." Arguing that he shares Marx's concern for the need for taking action to change society, Buell calls himself a "strategic ecocentrist." He believes that the imagination--far from being merely a dreamy state--as a fundamental transformative role. Accordingly, he is optimistic about ecocriticism's continuing contributions; not only to literary textual understanding, but also to the actual changing of society.

One of the speakers (I have forgotten who) referred to an interesting expression that might serve as new motto for ecoctritics to keep in mind. It was from a statement by Robert Kern calling for "no ecocentrism without anthropocentrism." The suggestion here is that we may need elements of both. We need to continue questioning whether these two outlooks necessarily constitute binary oppositions--or whether they can, and must act complementarily. Amidst the debate between Marx and Buell, I felt there was an underlying sense of hope that the latter will prove to be the case.

(2) Seeking Common Ground: A Dialogue on Integrating the Sciences and Humanities--by Edward O. Wilson and Laura Dassow Walls

While the Leo Marx--Lawrence Buell debate struck at the heart of some of the central tenets in the field of ecocriticism, the dialogue between Edward O. Wilson and Laura Dassow Walls reached out to a rather farther-ranging question, dealing with the possibility of finding a common ground between the often-alienated fields of the sciences and the humanities.

Edward O. Wilson has established a major role in the attempt to bring together people working in the entire range from the natural sciences, the social sciences and the humanities, on the behalf of saving the environment. He has been a leading spokesman in the attempt to maintain biodiversity throughout the world. His theory of "biophilia"--the idea that humans have a natural, genetically-based, affinity for life that binds us to all other species--has also been welcomed by many who have interests in the environment. The central concern of his latest work is "consilience" the idea that all knowledge is intrinsically unified, and that there is a small number of natural laws that can be found and that will one day--relatively soon, he believes--unite all fields of learning. To many in the humanities this idea has been on the one hand intriguing, in its promises for bringing about a unity between the arts

and sciences. But on the other hand it has raised serious concerns among many. For a central postulate of Wilson's idea of consilience is his faith that the natural sciences are on the threshold of finally providing a thorough scientific understanding of the mind, and that the laws that will explain the mind will also be able to explain all other aspects of life--ranging from human society, behavior, dreams, religion and the arts.

This was the bold claim of Wilson's presentation. He asserted that for a long time the research theme of the workings of the mind has remained the "black hole" of the sciences. For too long, because of a variety of social and religious taboos, scientists have held off in working on this, "the great unsolved question." But Wilson believes that we both need to and will be able to know the workings of the mind. He argues that the coming understanding of the mind will help humanists and the arts. He is optimistic that his understanding will be possible in a surprisingly short number of years. He counters objections to this claim by pointing to how quickly--far beyond anyone's predictions--scientists have come to and understanding of genetics, DNA, and the human genome.

Wilson surveyed of some of the similarities and differences between the sciences and literature. Both, he said, share a common aim of helping us to fix our place in the cosmos. But their methods and goals have been fundamentally different. Economy and precision dictate the principles and language of science. Metaphor and hyperbole are taboo. The arts, on the other hand, allow the transmission of details of human experience through artifice, based on an intuitive understanding of human nature.

Nonetheless, the sciences and the humanities can share similar approaches, Wilson argues. Scientists, he says, should "think like a poet, work like an accountant, and write like a journalist." In the end, he sees science and the humanities as becoming consilient--that is, coming to accept a unified set of laws for understanding the human mind. Wilson offered Henry Thoreau as an example of an earlier thinker who made an attempt to work toward a consilience between science and the humanities.

Laura Walls, an eminent scholar on the scientific thought of Emerson and Thoreau, responded to this opening by Wilson. She expressed her admiration for the major contributions of Wilson's wide-ranging work, but she also spoke of her reservations about accepting the idea that science will be able to thoroughly and fairly explain the human mind. She referred to Thoreau's assertion that by virtue of being human we are also grounded--so that what we know of the world is only real to our own views of it. Thus she implied the need for a sense of humility in claiming that we can ultimately know reality. Outlining some of the reasons why many in the humanities have not accepted Wilson's proposal of concilience, she pointed particularly to its reliance on reductionism--the faith, shared by Descartes, Bacon and other scientific positivists, that all processes are reducible to scientific principles.

Not surprisingly, there was no easy conclusion or resolution to the debate. Wilson concluded by rejecting the common belief in the need to erect a "fire wall" separating science from such areas as religion and art. This attitude,

he contends, is the "white flag," that is the lazy surrender, of an intellectual. He remains confident that as we come to understand the mind scientifically, we will also come to understand questions like those relating to values, ethics, and religion. For Wilson, while this will be difficult, it is by no means an insurmountable problem. "Stay tuned," he urges, for the answers are around the corner, and will come sooner than most of us imagine.

For many of us, especially in the humanities, it remains difficult even to conceive of what it could mean to come to an understanding of the workings of the human mind. Alternatively, could it be that another scenario for the future of research on the mind might come from the world of chaos theory--from its images of fractiles; where like in an infinitely branching river, the more one discovers, the more infinite the quest becomes. Not to worry, counters Wilson--the rivers of understanding will all converge, ultimately, in unity. Whether Wilson is ultimately correct in his prediction of science achieving his goal of consilience, or if such a unified understanding will forever remain beyond our grasp, in any case it is clear that there is a growing need for a new attempt for understanding and cooperation between those of us working in the humanities and the sciences. As Wilson and Walls suggested, we can no longer remain as ignorant or suspicious of each other's work as we have been. Their presentation gave evidence of a hopeful growth taking place in this joint exploration.

（このレポートを短くまとめ和訳したものが、ASLE-US大会報告の中にあります。）

ASLE Fifth Biennial Conferenceに参加して

飯　直子　(関西学院大学大学院)

2003年6月3日から7日の5日間、ボストン大学で開催されたASLE学会に参加する機会を得ました。“Sea-City-Pond-Garden: the *solid* earth! the *actual* world!”というテーマのもと、毎朝8時からプログラム。非常に充実した、多くの学びの時となりました。セッションでの発表とそれに続く議論、Lawrence Buell氏やLeo Marx氏をはじめとする講演会から多くの示唆を受けました。3日目にはField Sessions、最終日にはWalden Pond散策を中心とするField Tripが用意されと、盛りだくさんのプログラムを経験することができました。

セッションでは、今回のテーマをめぐるさまざまな視点からの発表が行われましたが、ソローに関する発表が多かったことは言うまでもありません。Thoreauvian Connectionsと題されたセッションでは、Stephen L. Taneer教授が”Thoreau and Current Motions”と題する発表、*Walden*にみられる有機的理論について次のように述べられました。ソローはこの有機的理論を*Walden*の中で芸術作品として表現している。風、川、水の循環、植物の樹液、人間の心の思想の流れ、地球の鉱物要素の段階的動きさえも知覚し、こういった自然の有機的流動性の中に自己の魂の啓示を*Walden*の「春」の章で描写している。また、ソローは自己と一体化された自然に興味があり、風景の中心にある湖の水のイメージには重要な特性が備わっていること、循環のイメージと風景の象徴が重要な役割を果たしていて詩的現実を想像する上で象徴的でわりかつ想像の構造という面で最も注目すべき点である。そして、湖を中心とするソローの理想とした自然描写が自己の完成と共に最後に完成し、*Walden*の”Spring”の章で輝かしく表現されている、との見解を述べられました。

また、Lisa Paciello氏は、実際に森で道に迷ったことの経験を通して、真実に自分を発見するためには一度は自己を失う必要があると感じた、との見解。若い新鮮な発表にも感銘を受けました。ソローの、いったんは道に迷うことによって、我々がどこにいるのかを認識し、また我々の関係が無限に広がっているということを認識することができるであろう、という言葉の理解を深め、文学と環境との接点を自分の体験を通して語られました。

彼女は、Waldenの森を歩くことは、その心の奥底深くに到達する旅であり、そこには自然によって霊感を与えられた自立した思想と現実の本当の孤独が存在するという自らの経験と、ソロー哲学との交点を新たな発見として強調しておられました。

3日目のField Sessionsは、ボストン市内のRoxburyに位置するNorth Dorchester地区を訪問し、DSNI(Dudley Street Neighborhood Initiative)という団体の都市環境に関する地域での取り組みについて学ぶ機会となりました。DSNIの使命のひとつは、地域の人々とパートナーシップを組み、協労して住環境の質を高めることです。以前は外観も衛生的にも十分な配慮がなされていなかったようですが、このDSNIの取り組みによって住民たちとコミュニケーションをとり、住環境を整備、保護しています。住民にとって人間存在の基礎であるその場所、すなわち住まいの場所を整備することは、単にその活動の背景である環境としてだけではなく、人間が場所に対するアイデンティティを見いだす上でも重要であると感じました。DSNIのコーディネーターから、住民と共に清掃活動を行うことによって、その地域や場所に対して愛情や責任をもつこととなり、それがその場所への配慮につながる、との説明を受けました。都市における場所へかかわりの重要性が、人間存在の根源となりうることを垣間見た思いでした。

最終プログラムとして訪れたWalden Pondは途中から雨の中の散策となりました。しかしながら、霧雨におおわれた湖にしばしソローに想いをはせることができ、初めて参加したASLE学会の最後を飾るよき記念となりました。

■■

「エコクリティシズム研究会」でSherman Alexieの小説、*Reservation Blues*を読む

塩田　弘(福岡大学)

夏休みの恒例行事となった「エコクリティシズム研究会」は、今回で早くも第13回目の開催となった。台風10号の直撃が懸念されたが、当日(8月9日土曜日)は朝から天気が回復し、会場の広島大学千田キャンパスには、会長の伊藤詔子氏、副会長の吉田美津氏をはじめ14名の顔がそろい、Sherman Alexieの小説*Reservation Blues*(1996)と、論文集,*The Greening of Literary Scholarship* (2002)を輪読し、有意義な意見交換がなされた。

Alexieの*Reservation Blues*については、最初に横田由理氏によって作家の略歴・作品の特徴、そして物語の舞台となったスポケーン・インディアン保留地について地理的説明と解説がなされた。偶然にも小説の舞台となった場所は横田氏がアメリカ留学中に滞在した町に近く、横田氏の体験を踏まえた解説によって物語をより一層身近に感じることができた。その後、各章の担当者がストーリーをまとめ、コメントを加えた後、参加者全員による討論がなされた。物語は民族の歴史や社会との密接な関わりがあり、研究会で知恵を出し合い物語を読み解く作業は、絡まった糸を解く楽しい作業であった。また、この本はロックバンドの物語として音楽に関する事柄が大きな要素となっており、この点で音楽に造詣の深い辻和彦氏や末中篤君のコメントは、小説に込められたロック、ブルース、ジャズなどのネイティヴアメリカン的混淆の音楽性を理解する一助となった。この小説はエスニック文学の可能性の焦点となっている文化混淆的アメリカ性がポストモダン性をうみだす中心的要素である。後日、思いがけずAlexie自身も録音に参加している*Reservation Blues Original Sound Track*を発見

することが出来たのも研究会での意見交換に負うところが大きい。

午後からは *The Greening of Literary Scholarship* の13本の論文について、それぞれ担当者の報告と意見交換があり、最新のエコクリティシズムの評論を短期間で読み漁り見識を深める密度の濃い時間であった。会の終了後の懇親会では、次回の研究会で取り上げる作品と論文集についての話し合いもあり、Susan Cooper の *Rural Hours* と *ISLE* の論文集 *The ISLE Reader: Ecocriticism,1993-2003* が候補としてあげられた。また、城戸光世氏が中心となってまとめた本会のこれまでの活動記録も披露された。さらに、メンバーの多くが参加した論文集、『新しい風景のアメリカ—Toward a New Ecocritical Vision 』(10月に南雲堂から出版予定)の出版記念会を今秋に開催することも決まった。

なお、上記の事柄についての詳細や会についての追加情報は、「エコクリティシズム研究会ホームページ」 http://ha2.seikyou.ne.jp/home/huckleberry/ecoc.htm に掲載を予定しておりますのでご覧下さい。

講演会報告覧「環境と文学のあいだ」

大川重郎（立教大学・院）

6月7日、立教大学において公開講演会「環境と文学のあいだ」が開かれた（主催：立教大学東アジア環境問題研究所、共催：同大学大学院異文化コミュニケーション研究科)。第一部は稲本正氏（作家・工芸家）による講演とスライド「森と文化の共生進化覧漱石をベースにして」。第二部は結城正美氏（金沢大学助教授）による講演「エコクリティシズム（環境文学研究）とは何か」。第三部は森崎和江氏（作家・詩人）による講演「文学・環境・異文化：歴史の交わる場所」。司会は野田研一氏（立教大学)。講師、司会者は皆ASLE-Japan会員である。

最初の講師、稲本氏は、講演前半で環境の現状と海岸線が長く森林面積の割合が多いなど日本の自然環境の特異性について、後半で、氏の著書『ソローと漱石の森』に関連したお話しをされた。稲本氏は日本と欧米の自然観の相違について、日本は自分を自然の内に置く「じねん」、欧米は外に置く「シゼン」であると指摘した上で、じねんの概念を持ちながらもシゼン概念を根底に持つヨーロッパ人の主体性に感銘を受け、しかし後にじねん的な「則天去私」という悟りに行き着いた漱石を、「自然と人間の関係の中から主体をどう作ればよいかを常に考えた人」であると捉えている。環境問題を考える際の主体の問題の難しさを考えさせられた。　結城氏はエコクリティシズムの理論的可能性について話された。この分野では、物理的自然と自然という概念とのインターフェイス（間）に関心が注がれているが、インターフェイスという場を生ぜしめている相互関係が固定化されたとき「間」のダイナミズムは失われ、エコクリティシズムは単純化された教義、ドグマと化してしまうという氏の指摘は重要であると思われた。また、Terry Tempest Williams の *Refuge* を取り上げた分析における、その文章が表現しようとしている「砂漠」のキーノート（基調音）が、英語原文に頻出する“ｓ”の音に表出しているという指摘は、私には未知の新しい視点からのものであり、興味深かった。

おそらくその独特の語り口に魅力を感じた方も多かったであろう森崎氏は様々なお話しをされたが、それらに通底するテーマは、「異質の他者」であったように思う。他者を認識し、他者から自分がどう見られているかということを問わないと地球環境も時代性も見えてこない、異質の他者、異質の性があるから生命は維持されている、と述べられたことが印象的であった。

３人の講演を聴いてもっとも強く感じたのはその内容の多様性であり、それは結城氏も触れられていたような、エコクリティシズムの“interdisciplinarity”を表わしていると言えるかもしれない。そしてこの講演会によって、特に環境に関わる研究の場合、その間口を広くとることの重要性を再認識させられたように感じた。

書誌情報

Adamson, Joni. *American Indian Literature, Environmental Justice, and Ecocriticism: The Middle Place.* Tucson: U of Arizona P, 2001.

多文化主義の視点から、主流の環境保護運動とエコクリティシズムの再考を促す本。E・アビーの精読により自然と文化を切り離す思想からくる問題点を指摘したあと、オティーズ、アードリック、ハージョ、シルコウらアメリカ・インディアンの作家たちの語りが、人種、階級等の社会的問題と環境問題との関係を訴えており、また、支配や搾取ではない人と自然との関係を模索し行動するための意識を育てる場所を提供していると論じる。特に、文化と自然の出会うところ・人が生きるために自然と向き合い働きかける場所としての「庭」(garden) の解釈が印象的。主に先住民作家を扱っているが、環境文学とその読み方を考える意味でも興味深い内容。（豊里真弓）

嶋崎啓他著 『自然との共生の夢--エコロジーとドイツ文学』 鳥影社、2002.

九州北部および山口在住のドイツ語学文学研究者５人による環境文学研究書。刊行の背景には、「自分たちの研究を［環

境問題］へ接続することで、少しでも問題の解決へ向けて貢献できないか」という共有意識があったと語られている。日独比較文学的アプローチをとる論考もあり、検討されている作品には泉鏡花や石牟礼道子のものも含まれる。「ネイチャーライティング」や「エコクリティシズム」の紹介や説明では、本学会誌『文学と環境』や『フォリオa』でのジャパニーズ・ネイチャーライティング特集が参照されている。（結城）

Branch, Michael P., and Scott Slovic, ed. *The ISLE Reader: Ecocriticism, 1993-2003*. Athens: U of Georgia P, 2003.
ASLE-USの機関誌*ISLE* (Interdisciplinary Studies in Literature and Environment)の発行10周年記念論文集。創刊者であるP. D. マーフィーによる序、95年以降ASLE-USの機関誌として発展させたM. ブランチとS. スロヴィックによるイントロダクションには、文学・環境研究をめぐる過去10年の動向がよく整理されているとともに、日本、イギリス、韓国などにネットワークを広げグローバルに発展しているASLEの今後の方向性が示唆されている。本書は三部構成で、Part 1: Re-evaluationsには山里勝己氏のスナイダー論を含む8本の論考、Part 2: Reaching Out to Other Disciplinesには学際的アプローチを導入した6本、Part 3: New Theoretical and Practical Paradigmsにはエコクリティシズム特有の＜理論＞と＜実践＞のダイナミズムをめぐる5本の論考が収められている。（結城）

野田研一 『交感と表象』松柏社、2003.
日本でのネイチャーライティング研究が始まってからほぼ１０年が経過した。この間の成果が元代表の野田氏によってまとめられた。本書ではネイチャーライティング研究における重要な概念を隅々まで照射し、懇切丁寧な解説と豊かな想像力で読者を魅了する。これからのネイチャーライティング研究の「方位」を明示する必携の書と言っても過言ではないであろう。（上岡）

新刊紹介

ーー多文化は風景をどう語るのかーー揺れ動くアメリカの今を読み解く最新の環境文学批評

『 新しい風景のアメリカ --Toward a New Ecocritical Vision--』（南雲堂、2003年10月、500頁、6500円）

このほど南雲堂から日本発エコクリティシズム論文集 『 新しい風景のアメリカ --Toward a New Ecocritical Vision--』が刊行される。

本書は『緑の文学批評　エコクリティシズム』(1998) につぐ、日本におけるエコクリティシズム実践の試みの一つである。『緑の文学批評　エコクリティシズム』ではこの新しい批評の、定義、出自と歴史、他の批評との関係性、主軸となる批評的レトリック等が明らかにされたが、この批評のテキストを身体として読み解く手法や、思想史的系譜や文化についてのダイナミックな批評の方法を実践して、19世紀半ばから、2003年現在までの主要アメリカ文学の＜風景＞を３部構成20章で論じている。本書第14章でスコット・スロヴィックが論じるように、アメリカで集積されてきた世界のエコクリティシズムの成果は、*ISLE*（米文学環境学会ジャーナル）20冊などに代表的に集成されたが、日本でもこうした研究を一巻の本にすべき時期がやってきた。この間日本でも文学環境学会誌や環境文学の教科書や啓蒙書、個別作家論も数多く出版されてきたが、本書はそれらに基づき、特に最近の多文化的状況と風景構築の関係に焦点を当てて、20の問題作のテキストを論じ継いだものである。15名の論者のほとんどが会員で、ASLE-Jやエコクリティシズム研究会で多くの作品や批評書を輪読・研究し、また米ネイチャーライティングの作家や批評家の講演を聴きながらエコクリティシズムの手法と視点から、従来キャノンも含むネイチャーライティングを研究してきた。

その結果多くの作家がこれまで不可視であった領域で新しい風景を創造していることに気づかされ、その新しさの共通項として＜アメリカを超える＞動きが見られることにも思い至り各論を展開することになった。各部のねらいなどは編者三人（伊藤詔子、吉田美津、横田由理）による概要に記されており、第一部で19世紀中葉を，第二部で20世紀前葉から中葉を、そして第三部で現代、新しい西部女性作家、ネイティヴアメリカン、チカノー、中国系、アフリカ系アメリカ作家などの多文化の風景を論じている。期せずしてここに論じた作家たちが環境への知覚から新しいアイデンティティを築こうとし、文化と自然、社会の中心と周縁の二元対立の克服を目指す姿や、またかつての＜アメリカ的風景＞構築における視覚の圧倒的優越に対し、むしろ聴覚や触覚など五感を解放して、自らが環境の一部となる新しい身体的感性、人種、性、階級と土地の絡まる新しい歴史感覚なども窺えた。

以下が各部と章構成である。

第Ｉ部アメリカ的風景――可視化への道程

1. 新しい地図を携えて――若きエマソンの＜自然＞論　辻　和彦/2. ことばの中の風景――ソローとエマソンの詩学　高橋勤/3. 歴史化される風景――ホーソーンの場所の感覚　城戸光世/4. ピクチャレスク美学を超えて――ソローとルーミニズム　伊藤詔子/5. メルヴィルと南海――三位一体のかなた　藤江啓子/6. フロンティアへの旅――フラーの『湖上の夏』/7. トウェインの川の表象―『苦難を忍んで』から『まぬけのウィルソン』へ水野敦子

第Ⅱ部　周縁からの風景 8. メアリー・オースティンとボーダーとしての砂漠　吉田美津/9. ウィラ・キャザーとアメリカ南西部――表象と歴史をめぐって　松永京子/10. ヘミングウェイとミシガンの森の記憶　新福豊実/11. 潮だ

まりのポリティックス――スタインベック『コルテスの海』を中心に　中島美智子/12. 一幅の画、一巻の詩としての風景――スナイダーの山水空間の創造　塩田弘/13. アニー・ディラードと透明なヴィジョンの解体　熊本早苗
第Ⅲ部　アメリカ的風景を超えて――環境と多文化主義　14.　9・11以降のエコクリティシズム　スコット・スロヴィック/15. ロペスの政治的無意識――先住民理解と相克と　大島　由起子/16. 汚染の言説をめぐって――「聖なる水」への回帰　横田由理 /17. トニー・モリスンとカリブの自然――ポスト・ウィルダネスにむけて　横田由理/18. 新しきウィルダネス――ユタから『悦楽の庭』へのリープ[越境]　伊藤詔子 /19. アポカリプス・ナラティヴと先住民作家の核文学　松永京子/20. アメリカ[金山]を超えて――キングストンの『アメリカの中国人』　吉田美津　エコクリティシズム年表/　索引

本書が多くの読者を得て、活発な議論が展開されんことを！　　編集委員代表/ 伊藤詔子

日野啓三氏とASLE-Japan

野田研一（立教大学）

１９９５年秋、日野啓三氏の短編集『聖岩』が刊行された。日野氏の作品全体のなかでこの一書の占める位置はさほど大きなものではないだろう。だが、私にとってこの作品集はとてつもなく大切な数少ない宝物のひとつだ。署名と朱の特別な印が付してある貴重な１冊だが、それ以上に重要なのは、冒頭部に配置されている「塩塊」というタイトルのエッセイである。それはアメリカ西部ソルトレイクシティからやってきたひとりの女性作家との出会いと深い共感を描いた美しいエッセイだ。

この女性作家はテリー・テンペスト・ウィリアムス－－石井倫代訳『鳥と砂漠と湖と』(*Refuge: An Unnatural History of a Family and Place*)の作家だということはいうまでもない。このエッセイで、日野さんはウィリアムスというひとりの作家を深く観察している。「茫漠と煙ったようにしか見えないその目」の奥に潜む「憂愁」を鋭くとらえ、あるいはかつて石井倫代氏がウィリアムスについて記した、無防備とも見えかねない「共感の才能の大きさ」に日野さん自身がいささか揺さぶられたとおぼしい経緯が、静かなトーンで語られている。

日野さんとウィリアムスの出会いは１９９４年３月、金沢市で開催された「環境と文学シンポジウム」(ASLE-Japan、読売新聞北陸支社共催）での一コマである。３日間にわたるシンポジウムの報告はASLE-Jニューズレター（No.2、１９９５年６月）に詳しいが、エッセイ「塩塊」そのものがもっとも詳細で美しい要約となっている。

それから２年後の９６年８月、ハワイで開催された「日米環境文学シンポジウム」(ASLE-Japan, ASLE-U.S.共催）には、日本からの招聘作家として、石牟礼道子氏とともに再度日野さんにお出かけいただき、朗読と講演をお願いした。日野さんの話に涙ぐんでいたアメリカ側の研究者Ann Fisher-Worth氏（ミシシッピ大学）にはその後、『デイリーヨミウリ』に一文を寄稿してもらった。さらに引き続き、翌９７年、慶應義塾大学で開催された年次大会でも基調講演をお願いした。

来年で１０周年を迎えるASLE-Japanだが、その短い期間に日野さんは三回にもわたってお付き合い下さった。新興の学会にとっては異例の出来事だろう。同時に、(勝手な言い分だが）ひょっとしたら日野さんにとってもASLE-Japanは何か惹きつけるものを持つ存在だったのかも知れないと思うことがある。作家日野啓三といえば、都市派の作家であり、とりわけ湿潤な日本的風土を嫌悪し、東京の乾いた無機的なたたずまいを大きな〈魅力〉として描出した作家である。だからこそ日野さんにいま〈自然〉について語っていただきたかったのだ。その要請に日野さんは充分すぎるほど応えて下さった。『聖岩』の「あとがき」には次のような一節がある。

> 「自然」という言葉が多い。五年前の病気以降、何となくそのことを考えることが多いからだが、自然は恐るべき混沌（カオス）なのか、それとも畏るべき理法（ロゴス）を秘めているのかーその問いは書くことによってかえって重く深まっている。

話は変わって、９６年の暮れのこと。その秋に刊行された『日野啓三短編選集』(上・下）についての書評依頼がこともあろうに私に舞い込んだ。自選短編集で、初期からの代表作がすべて収められているものだったため、私には荷の重すぎる仕事だと躊躇した。が、読んでいるうちにためらいは少し薄らいだ。書けるという自信が湧いてきたのではない。書きたいという衝動のようなものが少しずつ浮き上がってきたためだ。書評が出た直後、日野さんからおたよりをいただいた。和紙の美しい便箋に青いインクで２５枚にもわたる長文の手紙だった。

その冒頭には「お詫び」のことばが記されていて一驚した。私がこれを書評するとはまったく知らなかったこと、親しい人間の書評はやりにくいものであること、そして３０年にもわたって書いた短編全体を論じることの困難を思い、「本当にすまないと思いました」と記して私の労をねぎらって下さっていた。そのうえで、書評に触発されたいくつかの事柄について一気呵成に書き記しておられた。それはさながら作家日野啓三の〈思考〉と〈志向〉についての自己解説であった。私を慄かせるに充分であった。空前絶後の重く率直な手紙であった。いまもときおり取り出しては、日野さんの声に耳傾けてみることがある。

最新長編『天池』(1999）では詩人エミリー・ディキンスンを召喚された。野田壽訳『色のない虹』を机上に置いての執筆であったと聞いた。この作品もまた自然のなかの人間がその主題であった。日野さんは、ヒトはどこまで自然であるのかを問い続けておられた。それを知ることなくみずからを定位することはできないと考えておられた気がする。それは希望であり、同時に絶望でもあるような問いであった。

ヘルガのための八章 — 日野啓三追悼

巽孝之（慶應義塾大学）

日野文学を読みはじめたのは、そう昔のことではない。1991年に編訳書『サイボーグ・フェミニズム』を出版して以来、深く関わることになる出版社トレヴィルが日野氏のエッセイ集『モノリス』（1990年）を出していたり、畏友である科学技術史家・永瀬唯氏がギブスンを彷彿とさせる日野氏独特のジャンクアート感覚を絶賛していたりしたため、推奨されるまま、徐々に『階段のある空』『夢の島』に代表される彼独自の想像世界にはまり込んでいったのだ。したがって、1996年12月より1998年12月までの丸二年間、読売新聞読書委員に任命されたときには、隔週、大手町の読売新聞社会議室で開かれる読書委員会の折に、この先覚者的作家と談笑できるのが大きな楽しみとなる。すでにわたしの文章になじんでいたらしい作家は、初対面の折に「あなたの批評を読んでいると励まされるよ」と声をかけてくれた。ちょうど日本文学にも海外文学にも造詣の深い池澤夏樹氏が読書委員を辞めた直後であり、新たな「話し相手」を求めておられた日野氏とは、いつもパレスホテルで行われる委員会二次会が終ったあとにも個人的に話し込み、何度か、大手町地下のバーで真夜中近くまでグラスを傾け続けたものである。ニューウェーヴからサイバーパンク、ネイチャーライティングまで、わたしたちの共有する話題も時間も、ありあまるほどあった。

したがって、1997年の一年を通じ、わたしは何度か日野氏を三田にお招きすることになる。その春には、いまは名誉教授となられた元三田文学編集長・古屋健三先生とともに総合講座「芸術と文明」を運営していたので、6月3日に講演をお願いしているし、その秋には、日本アメリカ文学会第36回全国大会の会場校がたまたま慶應義塾大学だったため、10月12日午前の特別講演はもちろん、同日の夕刻には、ASLE-Japan/文学・環境学会の特別講演までお引き受けいただいている。さわやかな秋晴れの午後、当時の拙宅のあったシャンボール三田一階のイタリア料理店アルポルトにて、文藝春秋編集部や小谷真理も同席して和やかに昼食をともにしたのを、まるで昨日のように思い出す。われながら、まったく甘えきった態度だったとは思うが、このころには日野氏自身も委員会で「最近は巽孝之によく騙されてね」と笑い飛ばすほどになっていた。

すなわち、日野氏との個人的な交流は決して長いものではない。せいぜいここ五年ほどのことにすぎない。にもかかわらず、人間の時間感覚というのは不可思議なもので、わたしの中では－日野氏との共通言語を用いるなら、わたしの内宇宙では－数十年もの知己であるかのような濃密な時間が流れていた。そんな気分にさせる、不思議な人だった。亡くなる一年ほど前にも気軽に電話をかけてこられ「ディックを読んだときのような、あの心がふるえるような感動を与えてくれる新しい作家はいないか」と訊かれるほどに、飽くなき探究心の持ち主だった。そのときには小谷真理とともにジェイムズ・ティプトリー・ジュニアをお薦めしたのだが、さて作家はそのページをめくったろうか。

晩年の日野文学には傑作が多く、2003年1月には、同じく先頃亡くなられた英文学研究の巨匠・高橋康也氏の脚本、現代音楽家・一柳慧の作曲により、バラード系ニューウェーヴの極北であるとともにネイチャーライティングの収穫ともいえる長編小説『光』（1996年読売文学賞受賞）のオペラ版が上演された。この原作をめぐって＜ユリイカ＞1996年3月号のネイチャーライティング特集号で今福龍太氏と議論を戦わせたのは、貴重な思い出である。

『光』の発表後、1999年には長編小説『天池』が上梓され、長文の書評をものす機会に恵まれたが、じつはわたしは、まさに作家が本書原型を＜群像＞連載しはじめた年に作家と頻繁に会っていたので、そのモチーフがエピグラフにも引かれているアメリカ・ロマン派の代表的詩人エミリ・ディキンスンと、アメリカ風景画の代表的画家アンドリュー・ワイエスであることは、あらかじめ聞いていた。前掲アメリカ文学会での特別講演が「神なき時代の超越－ディック、ディキンスン、カスタネダ」と題されていたのは、そのことに因る。ゆえにこの書評も初稿では「ヘルガのための八章」というタイトルに決めていた。けれども、それだともろにネタバレになってしまう。神秘的瞬間（ミステリー）を主題に歌い上げる本書が、いわゆる推理小説（ミステリー）の形式を彷彿とさせるのは、何よりも最大の黒幕であるワイエスの名が、その表面からはいっさい削り取られているためである。だからわたしもゲラ校段階で、、本質的に多重的ミステリーである本書の構想に照らし、当初の仮題を削り取った。そして、2001年9月には、フィラデルフィアの会議を訪れたその足で、ワイエス家ゆかりのブランディワイン・リヴァー美術館を訪れた。その時の印象を、いつか作家に報告したいと願っていたし、その機会はいつでも得られるものと信じていた。まさかその旅の一年後に、作家の実体とは永遠に別れなくてはならないとは、夢にも思っていない。

だが、それらはあくまで外宇宙における別離であろう。わたし自身の内宇宙における限り、作家・日野啓三のすがたは、やがて本格的なワイエス論で再構築する自然風景において、再び活躍し始めるはずである。

＊本稿は、2002年11月2日に慶應義塾大学文学部英米文学専攻巽研究会HP＜Café Panic Americana＞(http://www.mita.cc.keio.ac.jp/~tatsumi/html/zensigoto/tt-hino.htm) に発表した追悼文をもとに加筆改稿したものであることをお断りする。

会計からのお知らせ

銀行への学会誌等の振込みは以下へお願いします。

［予告：ASLE-Japan／文学・環境学会 10周年記念大会］

ASLE-J10周年記念大会が 、2004年9月4日（土）～6日（月）、金沢市で開催される予定です。内容の詳細についての紹介および研究発表等の募集については 後日おしらせします。意義深い大会となるよう、皆様のご協力・ご参加をお願いします。 なお、シンポジウム、研究発表等に関するお問い合わせは下記へお願いします。

〒920-1192 金沢市角間町　金沢大学法学部
生田省悟
Tel:076-264-5826
E-mail: shogo@kenroku.kanazawa-u.ac.jp

＊事務局より：ASLE-Japanの運営はすべて会費で賄われています。今年度会費未納の方はお早めにご納入下さい。

【編集後記】

先日会誌『文学と環境』第６号が送られてきた。早速目を通してみると、内容は私が担当していたころとは隔世の感がある。いささか衝撃を受けたことは否定できない。会誌と競うつもりはありません。しかしニューズレターは若い人（気持が若々しい人）からの投稿を待っています。
今回も若い編集委員の協力で立派なものができあがりました。お忙しい中、原稿をおくっていただいたかたにこの場を借りてお礼申し上げます。（K）

役員名簿（2002－2004）

《代表》
山里勝己　（琉球大学）

《副代表》
生田省悟（金沢大学）
高田賢一　（青山学院大学）

《事務局幹事》
喜納育江（琉球大学）
高橋勤　（九州大学）

《会計》
近江満里子（東京工科大学・講）
小谷一明（新潟女子短期大学）

《監事》
西村頼男（阪南大学）

《ニューズレター編集委員》
上岡克己　（高知大学）
山城新（琉球大学）
結城正美（金沢大学）

《会誌編集委員》
石幡直樹（東北大学）
伊藤詔子（広島大学）
木下卓（愛媛大学）
Bruce Allen（順天堂大学）
村上清敏（金沢大学）

【運営委員】
《コンピューターセンター》
岩政伸治（白百合女子大学）
山城新

《大会運営》
大神田丈二（山梨学院大学）
小田友弥（山形大学）
関口敬二（大阪府立大学）
巽孝之（慶應義塾大学）
中村邦生（大東文化大学）
横田由理（元広島中央女子短期大学）
吉崎邦子（福岡女子大学）
吉田美津（松山大学）

《研究助成》
稲本正（オークビレッジ）
岡島成行（日本環境フォーラム）
野田研一（立教大学）

【発行】ASLE-Japan／文学・環境学会
事務局：〒903-0213 沖縄県西原町字千原１
琉球大学法文学部
山里勝己研究室内
Tel/Fax: 098-895-8295
E-mail: yamazato@ll.u-ryukyu.ac.jp

ASLE-J

【編集】
編集代表　上岡克己
高知大学人文学部
〒780-8520 高知県高知市曙町2-5-1
Tel:088-844-8197
Fax:088-844-8249
E-mail: kamioka@cc.kochi-u.ac.jp